

甘櫓丘遺跡群（2022-1次）範囲確認調査 報道発表資料

明日香村教育委員会
関西大学考古学研究室

調査地：奈良県高市郡明日香村大字豊浦

調査原因：範囲確認調査

調査面積：240㎡

調査期間：令和4年10月19日～令和5年3月29日

※現場は調査を終了し、埋め戻されています。現地での説明会・見学会はありません。

※現場及びその周辺は私有地となっております。関係者以外の立ち入りはできません。

はじめに

この調査は、明日香村大字豊浦808・851・852番地でおこなった甘櫓丘遺跡群の範囲確認調査である。甘櫓丘は、允恭天皇の時代に古代の神判法のひとつである盟神探湯神事が執り行われたところとされ、現在、豊浦寺跡がある向原寺横の甘櫓坐神社にその由来が残っている。そのほかにも、甘櫓丘には蘇我蝦夷・入鹿が邸宅を構え、蝦夷の館は「上の宮門」、入鹿の館を「谷の宮門」と呼ばれ、蘇我氏の拠点となっていたことが知られる。蘇我氏が滅んだ後は、斉明紀において、甘櫓丘の東の川上で陸奥と越の蝦夷を饗宴したことが記されるのみで、飛鳥時代後半の甘櫓丘については史料から窺い知ることはできない。

調査地周辺では、奈良文化財研究所が甘櫓丘東麓遺跡として甘櫓丘の東南に所在する浅く開けた谷部で発掘調査を行い、7世紀代の大規模な整地層と焼土層、石垣、掘立柱建物跡を確認した。遺構の年代や出土状況から乙巳の変や蘇我入鹿の邸宅跡として注目された。しかし、近年では、検出した掘立柱建物の規模や焼けた部材の量、遺構の性格、地名の考証から蘇我入鹿の邸宅は別の候補地であろうとする意見が浮上してきた。

明日香村教育委員会は、飛鳥地域における飛鳥時代前半期の様相を明らかにするため、令和2年度から甘櫓丘とその周辺の遺跡群の範囲確認調査を開始した。令和4年度は、令和3年度調査である4区を拡張して調査を実施した。本調査区は、東西15m、南北14m、本調査区の北側に拡張区として東西3.5m、南北8mを設定した。調査総面積は240㎡である。

なお、この発掘調査は、「明日香村と関西大学との学術・文化交流に関する覚書」に基づき、関西大学考古学研究室との共同調査である。

調査区の概要と主な検出遺構

本調査区及び拡張区の概要

本調査区は令和3年度の4区と重複して設定した。本調査区の地形は、南向きの傾斜が緩い小さな谷となっている。調査区の層序は、上からにぶい黄色砂質土（耕土）、オリーブ褐色砂質土、暗褐色砂質土、オリーブ褐色砂質土、褐色砂質土の順に堆積する。地山は花崗岩が風化した黄橙色砂質土で、調査区東側では地表下約60cm（約H=114.6m）で確認できるが、そこから地山はやや平坦に広がるものの、調査区の東半から西南方向に向かって急激に落ち込んでいく。この地山の落ち込みは北から南に向かって開く深い谷の東肩部分に相当する。この谷を埋め立てて平坦面を造成するため、谷を取り巻く丘陵の尾根を削り出している。地山落ち込みの最下層を確認するため、調査区南側で遺構面から深さ約1.7m断割を実施してようやく青灰色

の谷堆積を確認したが、今回の調査区では地山の最下層に達することはできなかった。遺構検出は、地山の落ち込みを埋め立てた造成土上面でおこなった。遺構検出の結果、本調査区では総柱建物、石列、柱穴、土坑、炉跡、焼成遺構、木棺墓、砂溝、素掘溝、拡張区では砂溝と土坑を検出した。調査区及び拡張区の出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器片、陶磁器片、鉄釘、鉄滓、不明金属器がある。

総柱建物

調査区の西側中央付近で検出した総柱建物である。南北3間、東西2間以上の規模をもつ。柱掘形の平面形態は隅丸方形もしくは不整円形、断面形態はU字状を呈する。柱掘形の規模は、一辺が約85～110 cmで、大きいもので130 cmを測る。掘形の深さは約60～95 cmとばらつきがある。柱間は掘形芯々で南北約180 cm、東西約210 cm。柱の大半は抜き取られていたが、1基だけ木柱が遺存しており、木柱の径は10 cm以上である。柱掘形には人頭大の石を根固めのために数個入れられ、掘形底面には根石のために拳大から人頭大の石を敷き詰めていた。柱抜き取り穴は断面形態がV字状を呈し、平面規模は柱掘り形と同程度の大きさである。柱抜き取り穴は、後述する北側石列を壊す形で掘削されており、柱を抜き取る段階では北側石列の方が古い。遺構の重複関係により、総柱建物と北側石列は同時併存、もしくは建物の方が新しいとみられる。柱抜き取り穴から7世紀後半の須恵器が出土した。

石列

調査区の北側と南側において東西方向に延びる石列2条を確認した。以下、北側の石列を北側石列、南側の石列を石列と表記する。北側石列は約25 cm大の横長の石を北側に面を揃えて並べる。横長の1石を立てて東西方向に石の長辺を揃えて一列に並べるが、調査区中央付近で北に向かって長さ約1.1 mにわたって折れ、そこからさらに西側に折れて延長する。石列の掘形を検出したが、未掘の為、深さは不明。南側石列は、約25 cm大の横長の石を南側に面を揃えて並べる。北側石列同様の並べ方だが、石の並びや面の揃え方は北側に比べやや雑な印象を受ける。南側石列の東端付近の2石分だけ、他の石材とは異なる天理砂岩が当て嵌められている。北側石列と南側石列は約8.7 m離れた位置で並行するが、詳細に見ると若干方位の振れが認められる。この振れは、全く別の遺構と考えるか、一連の遺構として構築の工程差もしくは後補による手直しとみるか、判断付かない。ただ、南・北側石列間には山土由来の整地土が明瞭に見えることから、石列を単位とした雛壇状の整地であったとみることもできる。それは南・北側石列の外側では遺構が少ない状況からみても、この石列がなんらかの区画施設であったと考えられる。

炉跡

調査区中央付近で確認した鍛冶炉である。約50 cm大の粘土を土手状に巡らし、その内側に高温で赤変した焼土が厚さ約7 cmにわたり不整形に広がる。この焼土は西側に向かって傾斜しながら受け口状に広がるが、そこに鉄滓が多く絡んでいた。鍛冶操業に伴う排滓口を西側に設けていたものとおもわれる。鞆羽口や炭は認められず、炉の上部構造は削られて残っていない。この鍛冶炉の北側には焼土を含む小穴2基を確認したが、操業炉ではなく、小型の廃棄土坑と考えられる。

焼成遺構

調査区の南側東寄りで確認した焼成遺構である。この遺構は貼床粘土の東縁中央に位置する。貼床粘土は黄橙色の山土を厚さ2 cmという一定の厚さで敷き均したもので、その範囲は約3.5

m四方に広がる。焼成遺構は、この貼床粘土の上面に約 40 cm大の範囲に広がり、赤変した焼土の上には炭が被っていた。この中から何らかの作業を示す遺物は認められず、作業内容は不明である。貼床粘土の存在を考えれば、この焼成遺構は煮炊き用の竈であった可能性がある。また、貼床粘土の下から 7 世紀後半頃の土器が出土したことから、飛鳥時代後半以降の施設であったと考えられる。

土坑

調査区南壁西寄りで確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し、最大辺で 76 cmを測る。深さは約 40 cmで、土坑内から須恵器の平瓶と高杯が出土した。平瓶は正位置に据え置かれるが、平瓶の上には開口する口縁に蓋をするよう平らな天理砂岩が置かれていた。平瓶内には粘土が溜まっていたが、遺物などの内容物は認められなかった。また平瓶の横では杯部を下に向けた高杯が出土した。

木棺墓

調査区の北壁の東側付近において検出した木棺直葬墓である。墓壙は長さ 235 cm、幅 85 cm、残存する深さは 30 cmである。墓壙内から鉄釘が約 38 本原位置を保った状態で出土したことにより、木棺の大きさは長さ 210 cm、幅は北側で 50 cm、南側で 40～45 cmである。鉄釘は平均して長さ 10 cm、厚さ 0.7 cmと小型である。墓壙の南側底部では黒色土器椀が伏せられて状態で出土し、これによりこの木棺はおよそ 10 世紀頃に埋葬されたことがわかる。

砂溝

調査区の中央付近に南北方向に 1 条、それにとりつく東西方向の素掘溝である。溝の規模は幅約 70 cm、深さ約 50 cmで、断面形態は箱型である。溝埋土は硬く締まった荒砂で、土砂が大量に流れて埋没した呈をなす。埋土から奈良～平安時代頃とみられる水差しの把手片が出土した。この砂溝は総柱建物の柱穴に沿って縦・横断するように流下し、これにより柱穴の根石が露わになった。

今回の調査成果

甘檜丘における土地利用の変遷が明らかに

今回の調査によって、甘檜丘に取りつく南向きの小支谷において、飛鳥時代から古代にかけての土地利用の変遷を確認した。今回確認できた遺構の変遷は次のとおりである。谷の埋め立て→北側石列→総柱建物・南側石列→柱抜き取り（7 世紀後半頃）→土坑→貼床・鍛冶作業→砂溝・木棺墓（10 世紀・平安時代）の順である。

今回の調査地から丘の展望台を越え、甘檜丘北麓にあたる平吉遺跡^{ひきまち}では、過去の発掘調査で 9 世紀前半の木棺墓が確認されている。本調査区の木棺墓より 1 世紀ほど古いが、古代において甘檜丘が墓域として利用されていたことがわかる。平吉遺跡は、7・8 世紀は豊浦寺と密接な関係にあり、瓦や金属器生産の工房や土馬を使った祭祀の場であり、9 世紀は墓地として利用された。このように、甘檜丘遺跡群の様相は平吉遺跡とよく似た様相をみせており、飛鳥時代から古代における甘檜丘の土地利用とその変遷を端的に示していることが明らかとなった。甘檜丘が飛鳥地域にとってどのような役割を果たしてきたのかを考える上で重要な資料を得ることができた。

飛鳥時代後半期を中心とした大規模な造成と遺構の性格

今回の調査地は、甘樫丘東麓に位置するが、飛鳥宮から見えづらく、谷が入り組んだ地形に立地する。この谷を埋め立てて大規模に造成し、7世紀後半頃を中心に建物などの遺構が活発に展開していた。また、村教委が実施した令和3年度調査では、今回の調査地の東側に並行する谷において7世紀後半～末頃の造成跡を確認し、甘樫丘東麓にある谷を飛鳥時代後半期に大規模に造成及び開発をおこなっていたことがわかる。

こうした大規模な造成の後に建てられた建物跡や石列は、周囲の地形に則して配置される。つまり、遺構は、谷の軸に直交するように意識的に配置されているのである。なかでも総柱建物は埋め立てられた谷の中心にあり、かつ柱穴底面には石敷のような根石を置き、木柱が沈み込まないよう手の込んだ仕事がなされていた。こうした柱穴の構造や柱配置からみて、今回検出した建物の性格として高床建物が考えられる。ただし、この総柱建物は規模が確定しておらず、また中心施設となるのかどうか周辺の調査を俟って検討する必要がある。

まとめと今後の課題

今回の調査の結果、甘樫丘東麓における飛鳥時代後半期から古代にかけての活発な土地利用を確認することができた。ただ、調査では少なからず飛鳥時代前半から中頃の土器類も出土することから、調査区周辺には飛鳥時代前半頃まで遡る遺構・遺物が広がっている可能性が高い。甘樫丘は史料上、飛鳥時代前半期についてはよく知られるが、飛鳥時代後半頃についてはよくわかっていない。今回の調査によって、いままで知られていなかった飛鳥時代後半期の様相が明らかとなった。そして、さらに遡った飛鳥時代前半期についても発掘調査によってその実像に接近しつつある。今後も周辺部での調査が望まれる。

表1. 甘樫丘遺跡群の調査歴

調査回数	調査機関	主な検出遺構	出土遺物
令和2年度	明日香村教育委員会	なし	なし
令和3年度	明日香村教育委員会	大型石列・敷石・木杭・柱穴・素掘溝	土師器、須恵器、墨書土器、瓦器、陶磁器、土馬、瓦、石製品（砥石ほか）、石材（榛原石）、木製品、燃えさし、木屑、自然木、種子、不明鉄製品、銭貨（寛永通宝）
令和4年度	明日香村教育委員会	総柱建物・石列・炉跡・焼成遺構・土坑・木棺墓・砂溝	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、鉄釘、鉄滓、不明金属器

関連史料「甘櫛丘」

① 『古事記』 允恭記

「於是、天皇、天下の氏々名々の人等之氏姓の忤ひ過てるを愁ひたまひ而、**味白櫛**之言八十禍日前於玖訶瓮居多而、天下之八十友緒の氏姓を定め賜ひき。」

② 『日本書紀』 允恭紀

「是を以て、一の氏蕃息りて、更に萬姓と為れり。其の實を知り難し。故、諸の氏姓の人等沐浴齊戒して、各盟神探湯せよ、とのたまふ。則ち**味櫛丘**の辭禍戸（石甲）に、探湯瓮を据ゑて、諸人を引きて赴かしめて曰く、「實を得むものは全からむ。偽らば必ず害はなむ。」とのたまふ。是に、諸人、各木綿手纏を著て、釜に赴きて探湯す。則ち實を得る者は自づからに全く、實を得ざる者は皆傷れぬ。是を以て、故に詐る者は、愕愕ちて、豫め退きて進むこと無し。是より後、氏姓自づから定りて、更に詐る人無し。」

③ 『日本書紀』 皇極紀 3（644）年 11 月

「蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を**甘櫛丘**に雙べ起つ。大臣の家を呼びて、上の宮門と曰ふ。入鹿が家をば、谷の宮門と曰ふ。男女を呼びて王子と曰ふ。家の外に城柵を作り、門の傍らに兵庫を作る。門毎に、水盛るる舟一つ、木鉤數十置きて、火の災に備ふ。恆に力人をして兵を持ちて家を守らしむ。」

④ 『日本書紀』 皇極紀 4（645）年 6 月

「蘇我臣蝦夷等、誅されむとして、悉に天皇記・國記・珍寶を焼く。船史惠尺、即ち疾く、焼かるる國記を取りて、中大兄に奉獻る。是の日に、蘇我臣蝦夷及び鞍作が屍を、墓に葬ることを許す。復哭泣くを許す。」

⑤ 『日本書紀』 齊明紀 5（659）年 3 月

「**甘櫛丘**の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。」



本調査区 全景（北東から）



本調査区 総柱建物（西から）



本調査区 総柱建物 柱穴の根石（東から）



本調査区 北側石列（西から）



北側石列 細部（北から）



本調査区 南側石列（南東から）



本調査区 炉跡（西から）



本調査区 土坑内出土状況（東から）



本調査区 木棺墓（北から）



木棺墓 墓壙内出土状況（南西から）